

生家の思い出

1. はじめに

私が生まれたのは、1936(昭和 11)年 1 月 4 日であり飯田市伝馬町二丁目である。折から第 19 回衆議院選挙に向けて叔父小塩完次は立候補準備を進めていた。これにちなんで立吉^{たつきち}と命名された。家中多忙であり健康に自信があり、懸命に努めていたが、丹毒に罹り悪化し大手術を受け瀕死状態に陥り、抗生物質などない昔のこと奇跡的に生還した。父の兄弟も多く工場の使用人も多く、母は手が回り兼ねて、私が乳児の時寝ていた六畳間の畳が痛んで凹んでいたものだった。

当時の政治情勢は、軍部台頭で不安定で 2 月 20 日は投票日であった。が、その 2 月 26 日には青年将校によるクーデター未遂事件いわゆる 226 事件が起きている。

婦人参政権が認められていない当時として、理想に近かった婦人参政権の実現を主張し、現実政治とはおよそ掛け離れた禁酒運動が主な主張点であり、飯田での地道な日常活動はなく惨敗した。

完次の母嘉壽^{かす}はその結果を達観して次の一首を詠んだ。荒畑^{にわか}に 俄に蒔きし作り物 実らぬとても理^{ことわり}ぞかし



生家松岡屋醤油店(大正 11 年初荷 大人形による宣伝繰り出し) 飯田はうだつの家並みが多かった

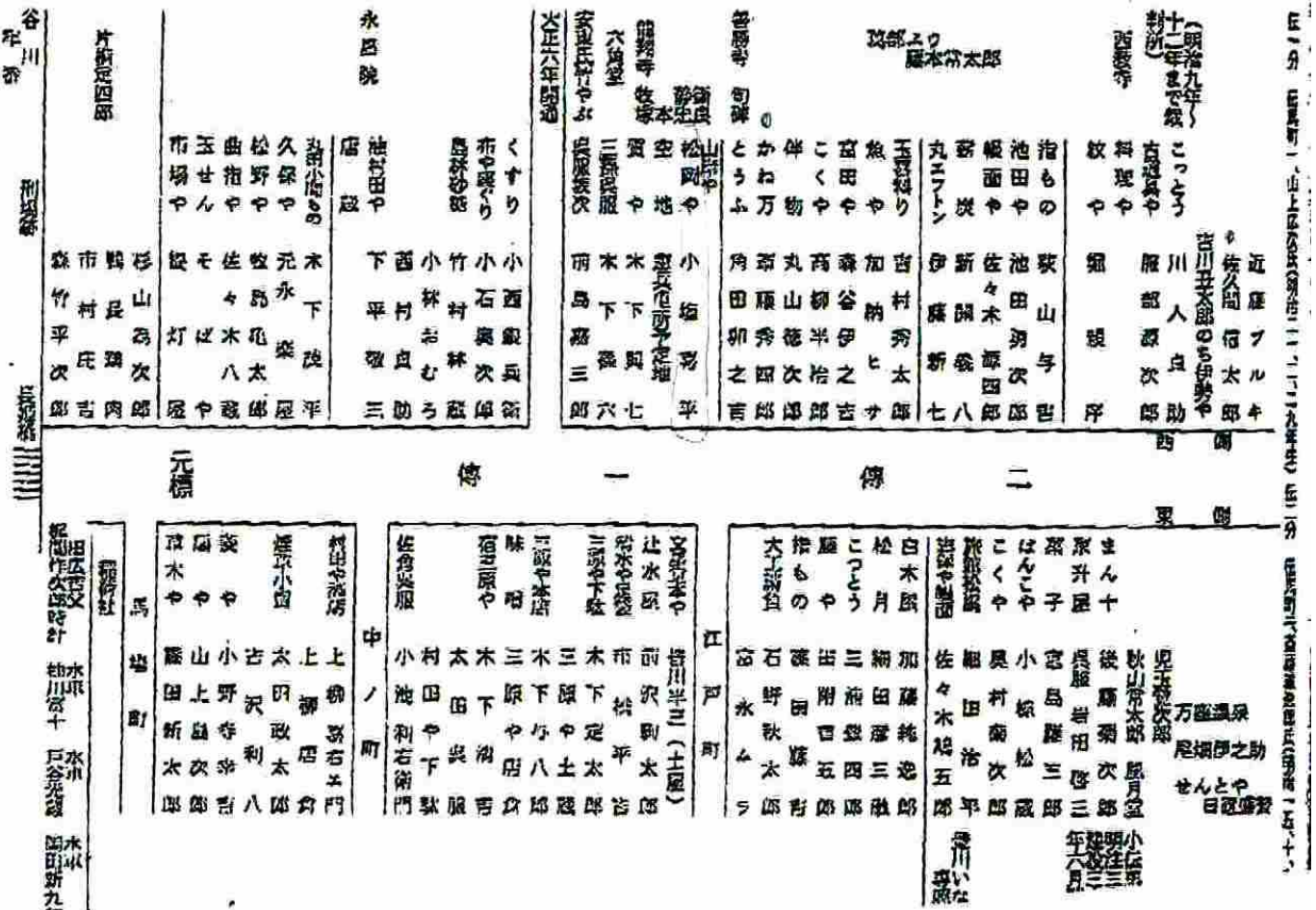
この写真の母屋には左右ともにうだつがあり、右側のが見える。ちんどん屋さんのいる所にもう一棟あり松岡屋の一部だった。

松岡屋の紀元は大変古く過去帳によれば 1549 年(天文)には祖先が伊那谷に移り住んでいた記録がある。確実な記録としては、1658-60(万治年間)には本町一丁目に塩、米などを扱う松屋を営み安兵衛を名乗っていた。しかし、1800(寛政 12)年 6 月 11 日に松屋火事(安兵衛火事)(飯田市立図書館に記録あり)を出し、お詫びのため一家野底に落ち延び、男兄弟は出家し後高僧となった。末娘與恵に養子を迎え。写真の母屋で醤油店としての再興を果たし 1818(文政元年)年、洛内本町から見て岡に登り松岡屋として開業した。この機に建てたものか譲り受けたものかは不詳である。

恐らく 2 階は格子戸作りであり、後年ガラス戸に改造されたものと思われる。

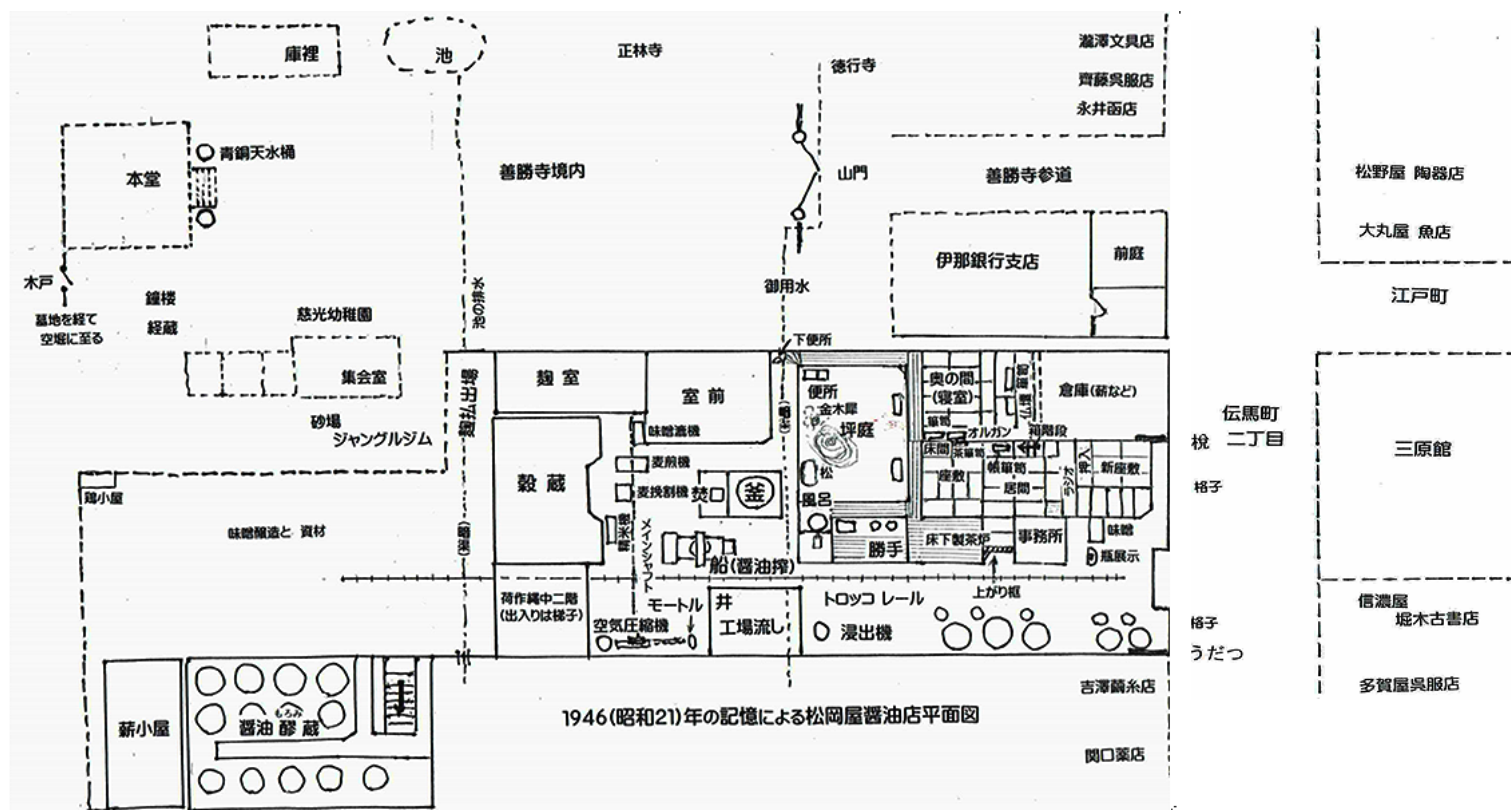
写真の上の方に見えるコンクリートの建物は、伊那銀行支店と言い木骨鉄筋の洋館で飯田の大火で焼失した。善勝寺参道の北側は永井紙函店であり、この棟にもうだつが見え、このようにうだつ(税)を上げている家並みだった。永井家出身

の永井 郁氏(飯田中学 47 回)は、JAL の鶴マークをデザインされた方である。その一軒上は かね万齊藤呉服店だった。
私の記憶年代では家の前は三原館(宿三原屋)と言う木造三階建ての大きい旅館があった。
郷土今昔家並み帖(村沢武夫編、飯田市立中央図書館蔵)によれば、正にこの位置に松岡やとして立吉の曾祖父小塩喜平の名前(上の段はぼ中央)が記載されている。(明治 30 年養子万次郎に家督を譲り明治 35 年死去。)



2, 伝馬町二丁目の生活

生まれ育った松岡屋の一階平面図の作成を試みた。何分小学校 5 年生の記憶であり限界承知である。



家の近くには善勝寺があり、その境内には慈光幼稚園があった。本堂横の木戸を経て墓地を通り、空堀を経て吾妻町や飯田駅方面への道は生活道路でもあり、山門は大きい観音開きで閉めても子供は腹這いになると通ることができた。蟬取りに夢中になり庫裡に忍び込んで仕舞ったこともあった。

家の構造は、うだつがある延長上が母屋の北限界であり、座敷と床の間までであり、何回か改造が行われているようであり、奥の間の寝室の部分は隣の棟に繋いだようであった。父の世代に改造した事務所は洋風で靴のまま入室できた。

穀類、塩、薪や樽詰めの入出荷にはトロッコを用い、レールが真っ直ぐに 醪蔵^{もろみ}まで伸びていた。

上がりかまちの天井近くには提灯箱が並び、弓張提灯が入っていた。中には柄から鯨の髭を伸ばすと良く 撓む^{たわ}馬上提灯もあった。使っていた木槌には天保八年新調と書いてあった。戸棚の引出の底には天保銭や寛永通宝などがあり、江戸時代がついそこにあるような家だった。夏が来ると唐紙の戸を外し蔵に仕舞い、風通しの良いよしず張りの戸に替えたものだった。春秋年二回は大掃除をし、畳も日に干して叩き埃を払っていた。付近の商店の名前などは 小五の記憶のみで書いており、歴史資料としては各種資料と照合の要がある。

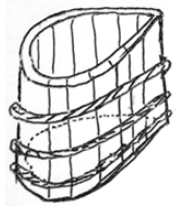
江戸町は、三原館の角から東に延びており、伊那銀行支店がほぼ正面となり、善勝寺参道とは食い違っていた。伊那銀行支店と奥の間寝室の境の隙間の障子を開けて覗くと江戸町を真っ直ぐ見通すことができた。幼少の頃はこの部屋に眠り、仏間にもなっていた。参道入口付近へは紙芝居、餅細工、飴細工などの屋台店が良く来たが、母は衛生に悪いと決して買っては呉れなかった。

当時は幼児が急に酷い下痢を起こし二三日で亡くなることが多かった。幼児を亡くした親御さんが「まだ水子^{みずっこ}だりますもんで、仕方ありませんの。」と近所の人のお悔やみに対し、諦めの受け答えをしていたのが子供心に耳に残っている。私自身未だ幼い子供だったのである。当時は何人か子供が生まれ、成人前に何人かを失うと言うのが世の常だったのである。父禄郎の兄弟は13人生まれ、7人成人し更に一人は学業を終えて夭逝した。現に私の兄弟も五人生まれ幼少期に二人の兄を亡くしている。

戦後経済が豊かになって栄養が良くなり医学が進歩し、少子化の現代では考え及ばないことである。不衛生なものを食べなかったお陰で、弱かった私も幼児期をなんとか乗り切り小学校に上がることができた。

私が育った年代の記憶で味噌醤油の醸造のための道具や設備を通覧してみよう。
父が事業を引き継いだ後大部分は大正10年代以降に動力モートルも入り、各種の機械が導入された。

○ 伝統的な小物道具の一部

	はんやく-----はんやく 言わば漏斗^{ろうと}付の担ぎ桶 上から見ると一カ所が突き出しており狭い所に空けるとき好都合だった。 水に浸した大豆などを担いだり、醪を船のタンクに運び込んだりした。
	ため 生上げや、火入れした醤油を運ぶ担ぎ桶、横板の一部が把手となつて上に伸びている。 後に砲金製のポンプを新調し生上げの輸送などに用いた。

○ **船**-----4寸(約12cm)以上もある厚い木材の箱であり船と呼ばれる。木製の長方形の 醪^{もろみ}タンクを背負っており、そ

ここに仕切り板があり操作して定量ずつ醪を袋に詰め順序良く並べ、分厚い木で補強した蓋を被せ、垂直に回転する直径15cmばかりの螺子の下に軸受けを置く、ゆっくり動力で回転させ搾り、前のタンクに生上げが溜まるようになっていた。この電動搾機の以前には、石を載せたり、船の外に起点を置き、力点は船の中に、梃子の先に石をぶら下げたそうである。

- 釜-----丈夫な桶こしき 甑 を乗せ米、大豆を蒸すための鋳鉄製の釜である。甑と釜の間には 毎回藁でつきの輪を作り一種のパッキンとしていたが密着は悪く横に湯気が吹き出していた。焚き口は半地下にあり、防空壕代わりを勤めたこともあった。釜からの暑い湯気が坪庭の松を枯らすので、この付近だけ別に底を設けていた。

- 麴室こうじむろ と室前-----味噌用米麴、醤油用麦麴を製掬する保温室。室前に拵げた米麦をスコップで切り返し攪拌し温度が下がったところで種麴を蒔き、幅 40cm×50cm位の籠ろじ に布を敷き米、麦を拵げ麴室で製掬する。胞子が発芽し自己発熱で温度が上がりに過ぎないように風を通す手入れは夜半になることが多かった。生育し過ぎると胞子が飛び苦味が出ないよう、頃合いを見て冷やし麴は麴室の後で払い出した。麴菌(日本コウジカビ)は、学名でアスペルスギルスオリゼーと呼び、専門の種麴屋さんから購入していた。米麴ができると甘酒を作って貰い(50 度で 6 時間保温が適正)飲んだものだった。

- 大正末期に導入の醸造用機械 父が万次郎から醸造業を継いで懸命に働き商売を拡大し、工場の大改革が行われた。
 - 精米機----米麴用の米を精米する。

- 麦煎機-----半円形で傾斜した煎り釜(ハーフパイプ)の中に鉄の羽根を往復回転させ、少量ずつ麦を落とし込み自動的に煎る機械である。麦落とし込み量と火加減に熟練を要した。

- 麦挽割機----醤油用麦麴のため煎り上がった麦を挽き割る機械

- 味噌漉機----大豆が残る生味噌を漉味噌にする機械であり、大変動力を要した。

- 空気圧縮機-----醤油醪は発酵を促すため酸素供給のため毎日櫓入れが必要であり重労働であった、動力ポンプで圧搾空気を作り醪蔵に送り 櫓の代わりに鉄管を底まで延ばして圧縮空気を吹き出し攪拌でき、櫓入れの効率化が進んだ。圧縮空気ポンプは直径 20cm 余のピストン式であり調圧空気タンクを持っていた。

しかし、潤滑油は菜種白締油でありシリンダーや給油器の温度が上がりに固まるので一回使う毎に分解掃除が必要で一苦勞であった。

- 浸出機-----父自慢のアイデアであった。

醤油を絞った醤油粕は未だ塩気が強く味もあり、そのまま廃棄できなかった。

そこで水道の水を極細く絞り、醤油粕を詰めた細長い桶の下から注入する。何時間か経つと醤油粕は水で膨らみ、最初はかなり濃い醤油が出てくる。これを何時間か続ける間に薄まって行く。これを次の仕込み水として活用する。一方、残る粕は塩気もなく豚の餌にしたり、塩害にもならず肥料にも活用できたのである。

- 醪蔵もろみ----- 大正末期に建てた 5 間×8 間(約 9m×15m)の大型の建物で飯田では唯一の大きさを誇っていた。

並んだ大六(大きさ直径 6 尺の桶)は交換修理ができるように配置されていた。大六の底板は厚さが

4〜5 寸(15cm)あった。底持ちのたが 箍は最も太く、ここで 100 石(2 トン近く)の醪を支えていた。

一般に竹のたが 箍がしっかり締まるためには三回以上回る長さが必要で、短いと締め込む途中で滑って緩んでしまう。大六の箍用の竹は寒い長野県では育たず、高知から取り寄せていた。

室前は広く桶屋さんが出張して大六に二人で登り掛け声と共に木槌を振り上げ締めて回り、箍の張り替えなど保守作業ができる広さがあった。増築した醪蔵の地所は善勝寺の寺領であり家賃を払っていた。

○その他 生家の生活記憶

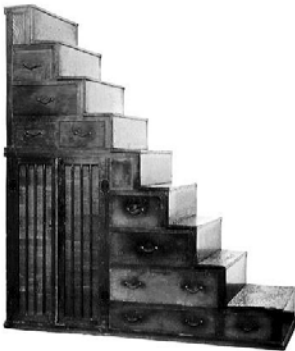
天秤棒を担いだり、荷車を引いたりして近在から野菜や卵とか散弾銃で撃った山鳥や雉子を売りに来たものだった。馬が引く「運送」と呼ぶ馬車で醸造用穀類や燃料の薪を購入した。時に家の前で馬がぼったり倒れ水や人参を貰い、馬草を貰って何とか立ち上がり帰って行ったことがあった。こんな訳で路上には所々しと や馬糞が見られた。

○ ごとう虫-----薪を炊事用竈用に割るとごとう虫が出てきた。これもまた子供の栄養源の一つだった。

また祖母は、障子に来る小さな蛾の一種「障子虫」を、これは毒が無いと羽根をむしり焼いて食べさせてくれた。

○ 稲子取り-----蚊帳の古で作った袋の口元におなご竹を一節縛り付け出掛けた、田圃の畦道を歩くと稲の葉の裏に留まっている稲子の影が葉裏に映るのでそっと手で掴み上にしごくようにして捕る、力を入れ過ぎると指を切ることがあった。飛び足を持って頭から竹筒に差し込んで、親指で蓋をする。袋が一杯になり帰ってくると火鉢で焼いて食べた。蚕の蛹(ヒビと言った)も沢山食べた。まるでこれらで育ったようなものである。

○ 箱階段



居間から二階に上がる階段は箱階段で、写真に似たものだった。

黒塗りで段が少なくて大きく急で子供の頃は手をついて上がった。

薄暗い二階の隅には武具が立て掛けてあった。

その中には敵の兜を剥がす為の鉤のあるもの、錆びた長刀などがあった。この2階は薄暗く大きい押し入れがあって言うことを聞かないと押し込まれたことがあった。製茶葉の絡まりを解くための3-4尺四方のぼつる切りもあった。

今の戸棚の引出には天保銭や寛永通宝があるなど、江戸時代が直ぐそこにあるような家だった。

最初に飯田に電灯が灯ったのは1900(M32)年であり風越プール松川発電所が伊那電を動かし、市内に電灯を灯した。大正時代には増力され近在まで普及した。写真にも100Vの電灯線の配線が見られる。軒下に三本配線があり家は真ん中と左、隣の家は真ん中と右から二本を引き込み、交互に引き込んであるのを見付け子供心に不思議に思った記憶がある。

家に入れば二本で100Vだが、変圧器は当時から単相三線式だったのだろうか。

このほかに工場動力用の三相200Vの引き込みもあった。私の記憶年代では1馬力のモーターから天井の梁のメインシャフトにベルトを掛け、起動時には唸るのでベルトを手で援助していた。

父の話では、小規模な伊那電灯管内は、伊那上郷から桜町に向かって電車が登り始めると発電所の回転と電圧が下がり市内の電動織機の動きが狂ってしまい大変困ったそうである。

1930(S5)年以降水力発電は整理され収束に向かい、中部配電の送電網に組み入れられて行ったようである。

断片的な記憶であるが、小学校の時風越プールの発電所に遠足で行った際、発電機が回っていた記憶がある。

当時の周波数は50サイクルだったと思われるが、戦後になって中部電力管内が60Hzに変更になり、蛍光灯やテープレコーダーが使えなくなった。はて、松川発電所の60サイクルへの周波数変更はどうしたのだろうか。

松川プールでは池田寿一先生が引率した6名の教え子をこのプールで亡くし、六体の地藏さんが立っていた。

戦時中大都市は空襲され飯田にも軍需工場が疎開して来た。電力事情は逼迫し少しでも電流を減らそうとモートルの近くに進相器と呼ぶコンデンサー箱が追加された。モートルに喰われる電気を送り返すものだというような説明だった。

伝馬町の生家は前頁の図の通りで、北側の二階にも新座敷があり住み込みの女中さんの部屋だった。写真のガラス戸が見える内部は細長い大広間で、年取りや、恵比須講など年に何回か家族と工場の人全員がぐるりと座り会食ができた。薄暗い棚には役目を終えた石油ランプが何台か吊してあった。

父母は、電灯が灯って嬉しかったのは給油や火屋掃除^{ほや}が要らないことは勿論だが、真下が明るいことだった。と話してくれた。但し当時の電球はエジソン型に近く排気管の先が尖っており、ともすると頭に刺さることがあった。

大広間の西側は大きい地袋になっており父や完次兄弟が居住したものや勉強した中学校の教科書などが置いてあった。

山門の前には野底川から取水し城下町を潤した御用水が流れていた。境内には私が通うべき慈光幼稚園があった。早生まれで知恵が遅かった私はとてもついて行けず二三日で辞めてしまった。

しかし、幼稚園の入り口に掛けてあった柱時計は珍しくお月様が出るもので未だに脳裏に焼き付いている。体が弱く一年に二三度は自家中毒という病気に罹り、気持ちが悪く下痢と嘔吐が酷く、その度に市長さんにもなった松井卓治内科医の先生に往診して貰い、今で言う点滴「リングル」を打って貰った。看護婦さんが二人がかりで煮沸消毒した金属箱から針やゴム管を順次取り出し、麻酔を打って左右の腿に一本ずつ真っ直ぐに針を刺し筋肉内に散らせる方法で、リングル瓶は両端封じ切りきりで^{やすり}鑢で傷を付けポンと折りゴム管をつないだ。小学校入学直前にも入院したほどだった。

善勝寺の脇寺正林寺宮島昭彦君、永井函店の二三軒上の瀧澤文具店利夫君が同年幼馴染みだった。明ちゃは言わばガキ大将、利ちゃは大人しかったが、立っちゃはまだ社交性が及ばなかった。少し離れていたが伝馬町一丁目の大石青物店の昭重君も小学校に上がって同期生であることを知った。

お勝手の板の間は広く家族が食事し、工場の人々は長椅子を置き、棚板を板の間の下から板を引出し、お膳を置いて食事した。食べ終わるとご飯茶碗にお湯をつぎ、沢庵一切れをお箸で回して洗い、お膳戸棚にしまっていた。家族の板の間の下に製茶用の炉があった。5月始め、炭火を大量に起こし、如露で一瞬水を掛け、焙炉^{ほいろ}をボタンと被せ、予め蒸し揉んだ茶葉を手早く撒いて両手で揉んで乾燥させた。1日次々と乾燥させた。



穀倉土蔵入口となまこ壁が見える。左端が圧搾機、中心小麦挽割機、右端は麦煎機、この時期に電動の醤油搾機他が稼働していた。(撮影は大正14年推定)



姉比奈小6年高女入学前、兄玄也小3年、立吉小1年入学前、父46才、母37才。
(撮影は1941(S16)暮れか1942(S17)年春推定、祖母没後)

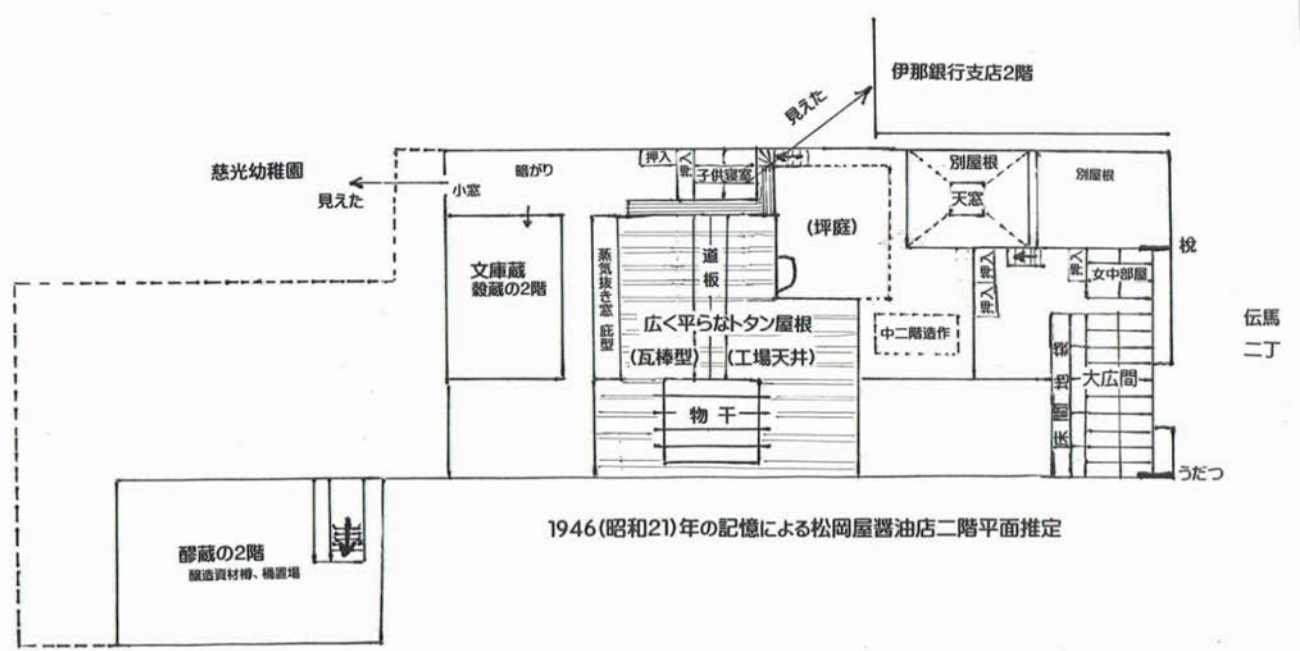
数少ない工場の写真二葉、左写真の背景奥に土蔵のなまこ壁が見え、そこに醸造用の洗った豆などを担ぐ「はんやく」などが掛けてあった。右端は醤油の圧搾機である。中央は生上げ^{きあげ}を火入れ釜に移す為の砲金製のポンプである。

勝手の上には中2階の造作があった。多分位置関係から2階の薄暗がりの床から廊下を通じ、多分父の祖母の部屋であったのであろうか。父が幼少の頃、父と完次叔父の祖母與恵が存命しており、うっすら記憶があると言っていたことがあった。また、父はまだお前達が行ったことがないところがあると言っていた。座敷の天井は高く8尺(2.5m位)あった。平面図は小5の記憶に基づいており正しいが、大正期の釜の位置と数が異なるようである。

2階は照明もなく生活空間でないのおぼろげであるが、記憶を頼りに2階の平面図を作ってみた。

2階の六畳の子供部屋への階段は坪庭の北の端から登る曲がり階段だった、裏2階と呼ぶ子供寝室があった、その廊下

から伊那銀行の2階宿直室が見えた。穀倉の2階が文庫蔵になっていてその薄暗がりを進むと小窓から幼稚園の砂場やジャングルジムが見え、唱歌やお祈りなどが聞こえてきて、その内に覚えてしまった。玄也兄と立吉は、この部屋で第二次大戦時期を越え、私は飯田大火前の小学校5年迄育ったことになる。



○ 飯田の醸造業者

「飯田の味噌醤油史」小林郊人著(小塩禄郎題字)1961(昭和36)年によれば、飯田の味噌発祥は1700(元禄3)年頃とされる。江戸時代から明治時代創業の醸造者は次の通りである。但し場所の記載がなく、本の別頁、家並み帖などの資料から拾った。(飯田市立中央図書館 調査提供)、

創業時期	商号/屋号/氏名	氏 名	場 所
1779(安永 8)年	三原屋		伝馬町一丁目
1783(天明 3)年	綿五		大横町、 移転前を含めると 1760(宝暦 10)年
1818(文政元) 年	松岡屋		伝馬町二丁目
1848(弘化 4) 年	吉本屋		通町二丁目
1854(安政元年)	古金(古宗)		
1885(明治 18)年	篠田知哲		
1885(明治 18)年	井村豊太郎		
1890(明治 23)年	藤本繁太郎		元善光寺
1891(明治 24)年	井村豊太郎		
1891(明治 24)年	田口広治		桜町
1894(明治 27)年	加藤定吉		
1900(明治 33)年	丸枡		
1902(明治 35)年	山本之丞		

その後、昭和初期までに綿屋(丸昌稲垣)、加登屋、谷口醸造などが開業している。

○ 写真が残るものとして、上の表にはないが、丸八 山田屋がある。



飯田知久町の酒・醤油・醸造業の製造販売店（明治30年頃）

○ この写真は郷土出版社昭和 58「写真集飯田の明治大正史」による。本の説明では、丸八山田屋明治 30 年頃となっている。

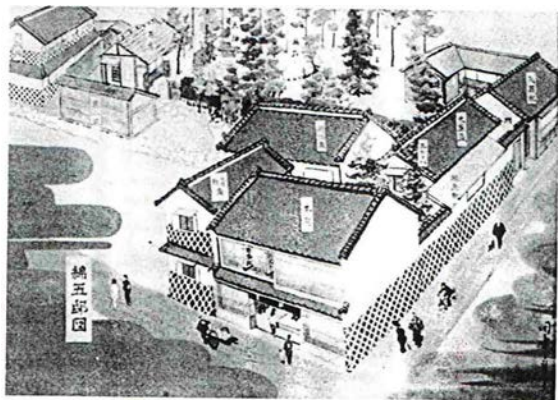
○ 村沢武夫著今昔家並み帖明治 23 年前後には山田菊五郎、寛政 9 年知久町三丁目に山田屋甚五郎がある。（飯田図書館調査）

○ 2 階の格子戸の数から推定して醸造蔵部分が凡そ7間(約13m)、左の別暖簾部分が店と思われ、大規模な構えである。

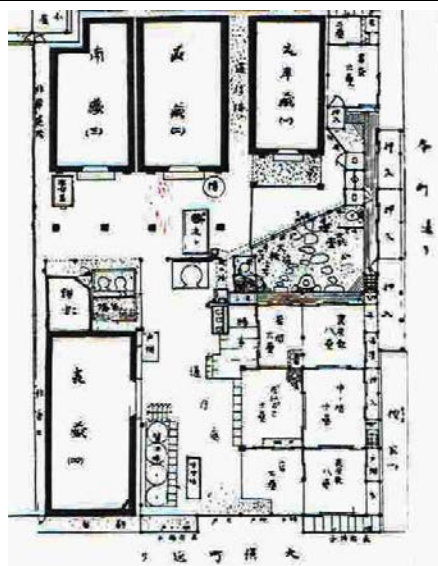
○ **綿五** 飯田大火前まで大横町と本町四丁目の角に綿五があった。前掲本によれば、大火の後大横町に移転したとされ飯田の最古と考えられる。1760(宝暦 10)年の卸帳が保管されていたとされる。家並み帖などによれば天保 2 年の頁に「綿屋五郎兵衛」、明治 23 年の頁に「原 五郎兵衛」とあり長い歴史と規模を持っていたことが分かる。

（前掲「飯田の味噌醤油史」および飯田市立中央図書館の各種調査による。）

また、明治時代の外観と昭和の平面図が絵で残されている。戦後、味噌醤油事業は閉店され、大横町と知久町 4 丁目角の同じ場所に子孫原彰一氏が住んでおられ、庭の一面に四十七士の一人赤埴源蔵の記念碑を建てておられる。



原家 明治末期の頃の絵



右 明治末期の綿五
大横町と知久町四丁目角
左 昭和始めの綿五の間取り、
いずれも組になった絵画である。
入口の左に桶が並んだ店が見える。通道路の反対側が帳場用の座敷が見える。

筆者が 2005(平成 17)年 80 歳を越えられた原彰一氏を訪問した際頂いたものである。

○ 飯田線点描

伊那電気鉄道は辰野から始まり伊那まで開通したのが 1912(M45)年、飯田駅開業が 1923(T12)年、飯田以南天竜峡まで開通したのは 1927(S2)年だった。天竜川添いの難所を通る三信鐵道区間はアイヌ技術者が測量し開通し豊橋まで出られるようになったのは 1937(S12)年だった。しかし、伊那電区間は 1200V、天竜峡以南は 1500V と電圧規格が異なり車両の乗り換えが必要だった。私が物心ついたころ飯田付近の貨物機関車は小さなもので、黄昏時になると貨車交換があるらしくピーピー ピャーと何故がもの悲しい汽笛だった記憶がある。

戦中に飯田線として国鉄に買収され伊那電区間も 1500V に統一改修され、料金も全国統一料金になり随分安くなったと大人が話していた。中央西線の爆撃に備え蒸気機関車を通したことがあり、汽笛を覚えている。



私が記憶している飯田駅は左写真の通り。(1923(T12)年開業)。やがて飯田線も全通し、お魚も入るようになったのだけれど、戦中の物資統制が重なり、お魚は貴重品だった。

戦没者の遺骨迎えに整列したのもこの広場だったし、始めて一人で東京に出たのもこの駅だった。

飯田弁は「であります」をよく使う。駅のアナウンスも「いーだー 飯田であります。」とアナウンスしていたものである。1992(H4) 無味乾燥な蒲鉾駅舎に建て替えられた。今はすっかり標準語である。

○ 菩提寺のこと



正念寺墓地は写真の場所と奥に累代の墓石があった。

←1927(S2) 年 6 月 4 日正念寺世話人墓地塀完成記念前列右
3 番目祖父小塩万次郎

祖母^{かす}嘉壽が胃癌で亡くなったのは 1941(S16)年 10 月 13 日であり 5 才だった。祖父が亡くなったのは 1946(S21)年 2 月 9 日小学 5 年の時である。

戦後 GHQ の命令でお墓を掘り起こし納骨堂方式になった。その後飯田の大火を経て城下町の様相は一変した。親戚の墓を順次回り花立てと線香立を立て拝んで回る風習も陰を潜めて行った。

大火後正念寺は、ほぼ同じ位置に再建され、墓地は掘り起こされ納骨堂式になった。400 数十年に渡る過去帳は大火の際持ち出され無事保管されている。

○ 紀元二千六百年行事

1940(S15)年紀元二千六百年奉祝行事が 11 月 28 日に盛大に行われた。だが翌日から厳しいポスターに変わった。下の奉祝歌は良く覚えている。折から善男叔父の従兄弟が飯田に来て歌った替歌もつい覚えてしまった。

金鷄^{きんし}輝く日本の 榮^{はな}(ある光身にうけて

錦糸^{きんしたばこ}煙草は 15 銭 栄えある光 30 銭

いまこそ祝へこの朝^{あした} 紀元は二千六百年

今こそ上がる煙草の値 期限は 1 月 15 日

あゝ 一億の 胸は鳴る

あゝ 鵬^{ほうよう}翼は 50 銭

○ 眠りについて-----母から聞いた眠りについて唱える言葉二つ。

◎ 寝る前 「寝るぞ寝た 垂木ぞ頼む 梁も聞け 何ごとあらば 起こせ勾配」

◎ 寝付かれない時

「京の三十三間堂には 仏の数が 三万三千三百三十三体あると申すが
嘘でござるか 真でござるか 以下何回も繰り返し、、、」

○ 日米戦争開戦と小学校入学

1941(S16)年 12 月 8 日の朝起きてくると、日米戦争開戦の緊張したラジオニュースが繰り返し放送されていたのを覚えている。

浜井場小学校に入学したのは開戦の翌年 1942(S17)年 4 月であり尋常小学校が**国民学校**と変わり、二期生であり身長は 107cm だった。教科書は「こくご」が 17 銭位、食パン一斤もこの位だったと記憶する。学用品もそろそろ払底になっていた。セルロイドの筆入れもなくなっていた。この頃も知恵が及ばず、皆先生の周りにワイワイ群がっているのに輪に入って行けなかったが、辛うじて通い始めた。

小学校では日本最南端の与那国島にいるヨナクニ蚕を飼っていたことを覚えている。繊維は丈夫で織物にすると三代持つと言われ三代蚕の異名があると書いてあった。

二年になると国語の他、九九のほか、日本神話の教科書があった、神武天皇や大国主 おおくにぬしのみこと 命 とか小人のような すくなひこな 拯名彦名神のなど何人かの神話の神様が出てきたし、國生みの話もあった。こくご教科書の最初は忘れてしまった。調べてみると「アカイ／アカイ／アサヒ／アサヒ」で始まっていたようである。最終頁にしりとりがあり「キツネ ネコ コブタ タンポポ ポンプ プカブカドンドン」のところを妙に覚えている。瀧澤文具店の陳列棚も閑散になったが、ゴム動力の模型飛行機組立キットだけはよく売られていた。

荒町(今の中央通り中劇の場所)に電気館と帝国館の二軒の映画館があった。戦果が上がったときには小学生は引率されてニュース映画を見に行った。天皇陛下が映る前には「気を付け！」と号令が掛かった。

「男女七歳にして席を同じゅうせず。」は実践され、例えば大松座の座席は男女に分かれていた写真がある。

音楽の教科書は大東亜共栄圏のことや軍歌が多くなり「黒潮寄せ来る大海原に 渡れば近しシャムの国 南へ 南へ船行く 船行く 山田長政日本男児」、と大東亜共栄圏に向かっていた。また「その敵 打て 打て 打ちまくれ、逃すな逃すな 打ちまくれカタカタカタカタ ダンダン弾の中」こんな歌もあった。中には「鮮やかな緑よ 豊かな緑よ 野山を覆い藁屋を隠し 薫る薫る 若葉が薫る。」と言った美しいものもあった。

職員室の前に宝安殿が立っていた。隣に二宮金次郎の石像があった。「芝刈り縄緋い草鞋を作り 親の手助け 弟を世話す、手本は二宮金次郎」と歌った。

勅語奉戴日というのがあり雨天体操場に整列した。教頭先生が紫のふくさが掛かったお盆を捧げ持って運び、壇上で受け取った校長先生が軸物の綴じ紐を丁寧に開き、おもむろに勅語を読み始める。小学校低学年には意味はあまり分からなかったけれど、戦争の足音が日に日に迫ってきた。

兄などは歴代の天皇を神武 しんむ 綏靖 すいぜい 安寧 あんねい 懿徳 いとく 孝昭 こうしょう 孝安 こうあん 孝霊 こうれい 孝元 こうげん 開化 かいか 崇神 すじん 垂仁 すいにん、、、と暗記させられていた。飯田中学に通う生徒はゲートル巻きだった。比奈姉から高女の歴史の教科書を見せて貰うと年表の埋まらぬところがあり、ある天皇の在位期間が 200 年を超すところがあった。姉が「これおかしいよね。」と言ったことを覚えている。神武天皇即位を紀元とする皇紀 2600 年暦を作り、天皇在位を当て嵌めよとすることに無理があった。

小学校 3 年迄は油絵が好きだった佐々木東穂先生から、理科好きの成瀬正人先生に代わり、私の理科好きの芽が出たように思う。4 年生位から徐々に知恵が追いつき授業が理解できるようになってきた。

1942(S17)年には働き手は徴兵され農業も産業も衰退し、軍需優先のため米麦を始めとし、味噌醤油、衣料品まで統制経済になった。例えばお菓子などは贅沢品であり多くのお菓子屋さんは戸締状態となった。

1943(S18)戦争が我が方不利になると、飯田界隈の作り酒屋は統合され菊水 1 社に、新聞も全県で信濃毎日新聞 1 社になった。翌 18 年には 6 行あった銀行は八十二銀行 1 行となってしまった。

○ 学徒動員勤労奉仕



○ 味噌醤油は統制物資で当時は必須の生活必需品であり飯中、長姫中などから勤労奉仕隊の支援を受けた。味噌醤油は配給になり毎月 25 日までだったように覚えている。

○ 小学生も夏は桑の皮むき奉仕があった、春蚕様が終わった桑の枝を細い杭の間に通し皮を剥ぎ、皮を集めて送り繊維として木綿の代わりに学童服などに織るのである。

肌触りがざらついた学生服が一回配給になった記憶がある。
冬は麦畑に行き列になって麦踏みの奉仕に行った、0.25 勺米の特配があった。

←従業員、学生勤労奉仕隊と玄也、立吉 1944(S19)夏

この青年らの何人かは戦場に行ったのではなかろうか

○ 國の祝日と唱歌 祝日には雨天体操場で必ず歌を歌った。記憶に残る紀元節と明治節を上げる。

紀元節 雲に聳ゆる高千穂の高嶺下ろしに 草も木も靡き伏しけん 大御代を歌う今日こそ楽しけれ

明治節 アジアの東 日出るところ 聖の君の現れまして 古き天地閉ざせる國を大御光を隈なく払い

教えあまねく 道明きらけく 治めたまえる御世尊

また、毎月一回暁天動員と言って 6 時頃眠い目をこすりながら浜井場小は大宮神社、大手町小は御三霊、愛宕小学校は愛宕神社というように神社参拝に行った。この時歌う歌もあった、「この鎮宮に静まりて、、、」子供の頃に何回か聞くと歌詞は難しくその時は分からなくても曲と共に良く覚えてしまうものである。

○ サイパン島からの謀略放送、近接信管

1944(S19)年 7 月 4 日にサイパン島が陥落する前の 4 月 23 日には米軍はもう 50kW のラジオ送信機を設置し謀略放送を開始した。

周波数は 1010 キロサイクルだったと後で知った。飯田では高級受信機と高いアンテナがまだ多く残っており、聞かれた方も多いと思います。私も鮮明に覚えています。米本土で録音しサイパン島に空輸していたと言われる。我が方は報道(ニュースをこう呼んだ)の最後に放送員が名前を名乗ることが始まった。このほかに重慶からの放送も僅か聞こえた。

定年後拓殖大に数年間勤務していた頃、当時一橋大山本武利先生がこの謀略放送のことを朝日新聞に書かれ、聴取記憶がある旨を申し出でて面会させて頂き、その際の送信機の資料、帰投する B29 を誘導した電波方探の資料などを頂いた。先生は、後早稲田大学に移られ「ブラック プロパガンダ」と言う著書を著しておられる。

日本ではその敵性放送が国民の耳に届かぬようにするため懸命の防遏放送を行った。後に知ったことであるが、日本放送協会の埼玉県本郷送信所敷地内(現文化放送送信所敷地)に急遽送信機を設置し懸命の沢山人ががやがやしている妨害音を送信した。

米国は、戦艦の対空砲弾発射の衝撃に堪える真空管を実用化し、対空砲火弾が我が方の艦載機の傍を通っただけで爆発する近接信管(Proximity fuse)の開発に成功した。この結果日本の艦載機は一機も帰投することなく悉く打ち落とされてしまった。また日本海軍の作戦は暗号解読によって漏れてしまい、ミッドウエー海戦では日本海軍は手痛い損害を被って惨敗した。サイパン島に近い日本統治下だったテニアン島の戦いにも敗れた。サイパン島、テニアン島から B29 を発信させると本土各地が爆撃可能となった。ラジオの大本営発表は常に軽微であり、発表とは裏腹に戦況は急激に悪化した。

○ 空襲の始まり、名古屋の空襲

1944 年 11 月 23 日に日本軍の予想より早く意表を突いて米軍は東京武蔵野市の中島飛行機工場一帯を爆撃した。重慶から発進とされる。

急遽、喜男叔父智叔母一家は6人の子供を連れグラマンの機銃掃射を避け竜丘村桐林の実家の納屋に疎開した。翌1945(S20)年3月10日には東京下町一帯は大規模な焼夷弾による絨毯爆撃を受け一夜にして10万人が亡くなった。「油脂焼夷弾は、消火できる。」と政府は宣伝し被害を拡大したのであった。また、当時のポスターの標語「塵も積もれば山となる。とか欲しがりません 勝つまでは」であった。

5月になると名古屋が本格的に空襲を受けるようになった。夜になると飯田から南西約90km弱に見える名古屋上空は赤く染まり、遠く小さく飛行機雲も見られた。

長野、松本に向かう爆撃機が飯田地方を北上し警戒警報が出たし、空襲警報になったこともあった。米軍は爆撃の直前に航空機から銀紙を散布した。日本のレーダーは手痛い妨害を受けたと思われる。撒かれた銀紙を生徒が翌日学校に持ち込んだが、先生方も知るよしなく、妙に口をつぐんでいた。

後年レーダー技術者になってから、この銀紙はチャフ(chaff)と言うレーダー妨害手段だったことを知った。

爆撃対象が大都市から地方中小都市に移り、8月6日に広島に原爆(新型爆弾と言った)が投下され、9日に長崎が続いた。今までと桁違いの被害を目の当たりにして、日本は漸くポツダム宣言の無条件受諾に傾いて行ったのであった。

朝日新聞に仁科芳雄博士が原爆の原理図のようなものを書いていたのをうっすら覚えている。

長野に引き続き松本が空襲に遭った。8月13日だったと思いますが、恐らく多摩川精機工場が標的だったのであろう、米軍偵察機が飯田の空を悠々と旋回しているのを物干しから眺めた。町の噂はあと二三日で飯田も空襲に遭うぞと言われた。その15日が玉音放送による終戦の詔勅であった。このように幸飯田は空襲を免れた。当時あるラジオ屋さんなどは禁止されていた短波放送を密かに聞いていたとも聞いたことがある。

我が軍は電波探知機と見張り員の情報により東部軍情報をラジオ放送していたが、進入機が多くなると正直分からなくなっていた。名古屋は中部軍管区に属し、名古屋が空襲を受けても東部軍管区情報では全く触れられなかった。

東部軍管区地図や銀紙の記録は当HPの別項に詳述しております。また、夜間になると全国周波数統制で同一周波数のため、舞鶴鎮守府司令長官発令の軍管区放送が聞こえたこともあった。

○ 満蒙開拓

1938(S13)頃から満蒙開拓が国策で始まり特に南信地区から渡満した方々は異常に多かった。泰阜村などは分村までして満州へ向かった。末期には成人男子は徴兵され入植が困難となり少年義勇軍の入植が続いた。そして終戦間際に関東軍は撤退してしまい、8月9日にはソ連軍は参戦したが年配者と婦女子ばかりとなった開拓民は路頭に迷い決死の逃避行となった、逃避行の途中で途中年配者は取り残され、襲撃され、集団自決まで行われた。入植後志願した義勇兵の多くは終戦後シベリヤ抑留に回されて極寒の地で命を落とした。

総送り出し人数は27～32万人と言われる。記録によるとなんと1945(S20)年5月になっても送り出していたのである。無事故国へ辿り着いた帰国者は11万人に留まったと言われる。中学二年の時に習った理科の小平義雄先生は九死に一生を得て帰国された方だった。

公的な記録本「開拓村長野村史」、次々と肉親と死に別れ遺髪を守って帰郷を果たした婦人が著した「七人の遺髪」などが出版されている。

また後年になって当時の状況を映画化した「望郷の鐘 満蒙開拓の落日」山田火佐子監督が2015(平成27年)に完成し各地で公開されている。この中で長岳寺の住職で自ら開拓民を経験し、戦後は日中の戦争孤児の救済、面会、帰国に尽力された山本慈昭氏の献身も伝えている。

また阿智村には満蒙開拓記念館が建てられている。過疎の地であった長野県南部から如何に多数の開拓民が送られたかが数字で示され、帰還者の赤裸々な声が録画公開され、当時の写真などが展示されている。天皇陛下ご夫妻も訪問された。

不幸にして体験した昭和戦争史の負の遺産を直視し、語り継ぐと共に、正の遺産として活かす道を来訪者に問いかけている。

○ 食糧不足、松根油、木炭自動車

戦中徴兵で働き手を失い諸産業が衰退し食糧不足は深刻化し、学校の校庭も芋畑に変わった。甘藷の葉柄、南瓜の葉柄、すべりひゅなども食べた。南方から石油資源が来なくなり、自動車も木炭自動車になった。



戦中、家の前にトラックを止め送風機を回している運転手、その真っ赤な穴を覗いた記憶がある。

トラックの運転席と荷台の間に円筒形の装置を積んで、上から短く切った薪を詰め込み下の穴から火を付け、送風機で風を送り燃やし、小タンクから水をポタポタ垂らし込んで、発生炉ガス(一酸化炭素と水素混合気)を発生させる。このガスを濾過しエンジンへ、性能は落ちたがギリギリ運行できた。

←写真はある website から得た同類の木炭トラック

伝馬町には市内バスが走っていたし、名古屋までのバスもあった。ガソリン車でも橋北への登り坂とか、伊賀良村育良への急坂はあえぎあえぎだった。平坦な大都会では木炭式バスやタクシーもあった。しかし飯田では恐らく坂が登り切れなくて実用にならなかったと思われる。家の前で準備をしていたトラックのみ記憶に残る。

父は、味噌醤油組合の会議で長野へ良く出張したが、中央線、篠ノ井線の汽車も石炭の質が落ち坂道が上がりず、坂の手前でしばらく休んで水蒸気圧が上がるのを待ちあえぎあえぎの運転だったそうである。

航空機産業も深刻で、ガソリンの代わりに資源が限りある松に目を付け木に傷を付け松脂を採集したり、松の木を切り倒し松根油を抽出した。飯田付近では伊賀良村育良の街道沿いに工場があつてとても臭かった。本当に航空燃料になったのだろうか。

潤滑油も入手困難になり小学校生徒の家庭に蓖麻^{ひま}の栽培をさせたことがあった。毒があるから絶対に口には入れないようにと言う嚴重な注意書きが父兄宛に配られた。蓖麻子油^{ひましゆ}は下剤にもちいられたが、冷えても固まり難いことから航空機用潤滑油にしようということであった。我が戦闘機は与圧がなく失神して高空に昇れなかったのに引き替え、米軍機の燃料タンクは合成ゴム製で堅くならず、与圧がされ成層圏でも楽に飛行ができ爆撃が遂行できたのである。

飯田中学は、白い校舎を目立たなくするためコールタールを屋上から垂らして汚し、終戦間際になって雨天体操場を急遽改造軍需工場化し学徒は動員されたが本格稼働前に終戦となった。兄玄也の一年上級生以上である。

姉比奈の飯田高女では、日本紙を^{こんにやくのり} 蒟蒻糊で貼り合わせ**風船爆弾**を作るための生徒が動員され、また疎開してきたレンズ工場でレンズ研磨作業もした。

町の鉄工場にも海軍の将校が監督に入り巡洋艦の部品だと言って昼夜交代で旋盤を回していた。醸造機械の修理などで子供なりにその鉄工場の亭主とは親しかったが、何時もの調子で顔を出すと、ピリピリしていて子供は駄目だと追い返された。

○ 歯科技工士の細工を飽かず眺める。お蚕様のこと

母実家の兄私から見て伯父は歯医者さんで、二階の治療室の隣が住み込みの技工士さんの作業部屋だった。歯の上下の石膏型から巧みに蠟でインレー型を作りこれに蠟で細い柄を付け鉄管の中に納め、石膏を流し込む。熱すると蠟は溶けて流れ燃えて充填用インレーの鋳型ができる。アセチレンバーナーを吹き掛け充填用金属に溶かし、下から真空ポンプで引くとその湯(溶融金属)が鋳型に吸い込まれインレーが鋳造されるのである。恐らく今も基本的にはこの工程は変わっていないのではないかと思う。未だに虫歯治療に歯医者に掛かると、そこはかとなく懐かしさが込み上げてくる。

子供の時に見た事物は記憶や知識の根底となって残るものである。伯父さんには乳歯の時期まで治療して頂いた。当時は小さな虫歯は穴を削り、金銀パラジウム粉末を水銀で練りアマルガム(常温水銀合金)とし、穴に押し込み固まらせる「ア

マルガム充填治療」が行われた。現在は水銀中毒を避けるため、小型でもインレーを作るようである。また近年はレーザー照射 で歯槽膿漏を治療するとか、光硬化樹脂など想像外の新素材が生まれている。

母の生家は養蚕農家を兼ねていた。茅葺きの家があり毛蚕^{けご}を掃き立て地域の農家に配っていた。2階の養蚕室に新しい桑を乗せると一斉に這い上がってきて食べ始めるとその音がザワザワザワと思いの外大きかった。あるとき五眠を過ぎしきりに首を振る蚕十匹ばかりを貰って来たことがあった。やがて繭を作り、蛾が出てきて羽ばたきし交尾し卵を産むのを眺めた。郊外の家々では、内職に一〜二台の糸繰機を持ち繭を茹で生糸を紡いでいる家が多く、道の外から巧みな手許を眺めたものであった。

○ 戦後の生活 ララ物資

戦中出征兵士が多くなり働き手を失い農業も諸産業は疲弊し衰退し食糧不足は深刻だった。敗戦後復員軍人による人口増が加わった。米国では日本を含むアジアへの援助団体として米国ではララ(LARA; Licensed Agencies for Relief in Asia)が結成された。この活動を支えたのは米国のクエーカー教徒のキリスト友会であった。

1946年11月30日 第一便が横浜港に到着した。日本側の受け入れ責任者は、第二代の皇太子の英語教師でクエーカー教徒であり長年在日したミス ローズ(Miss. Esther B. Rhoades)であった。飯田市内の家庭へはサ克蘭ボの缶詰、トマトジュースなどの缶が配給になった。始めて飲んだトマトジュースの味は今でも忘れない。学校では干葡萄、次に溶かした粉ミルクを飲んだことを記憶している。

完次叔父連れ合い叔母小塩とよ子はミス ローズと親交があり、1947(S22)4月20日の飯田の大火の直後、急遽東京で会談し飯田大火の被災者の窮状を訴え 5,000 食の特別援助が実現した。その後国会では全国規模での食料援助に感謝し国会で感謝決議が行われた。

終戦直後、インフレ率が急上昇し、幣原内閣は 1946 年 3 月 3 日付けで旧円札の市場流通を差し止め、1 世帯 1 ヶ月の引き出し額を 500 円以内に制限する等の金融制限策を断行した。小額紙幣はそのまま流通させた。新円発行が間に合うまで旧円札に証紙を貼ったこともあった。要は旧 100 円を新 1 円とするデノミネーションであった。

3、飯田大火で類焼

1947(S22)年 4 月 20 日の飯田の大火で伝馬町二丁目の醤油醸造設備と住まいは類焼した。
幸い父が祖父母のため宮ノ上に建てた別荘に一家が移り住むことができた。

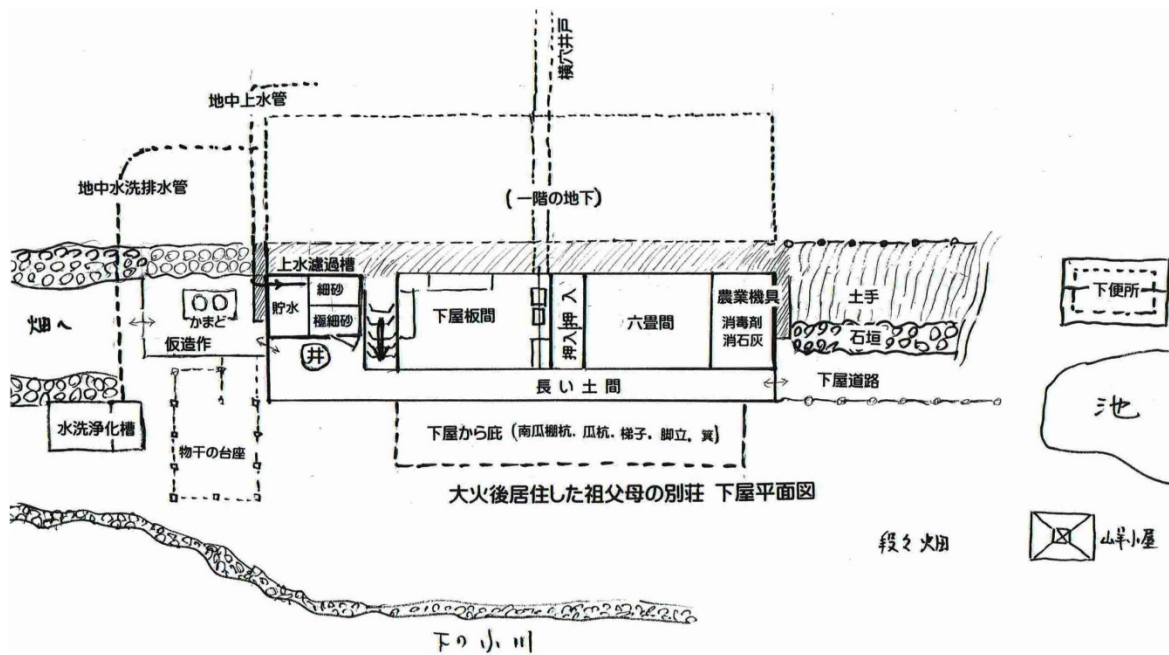
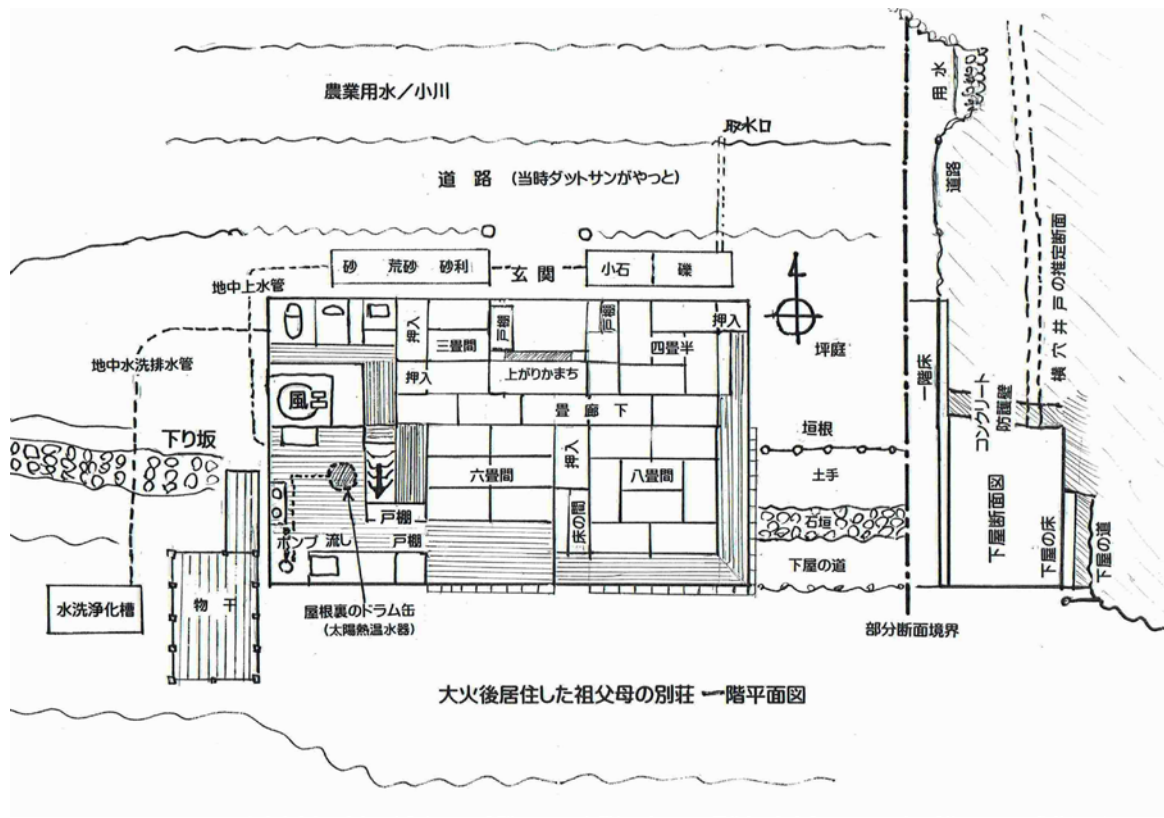


今宮神社の山の細道より、西から



東野から坂を登って 東から

雑誌「伊那」に「焼け行く飯田を一人眺めて」を載せていただいた。1930(S6)年に建物の建築と共に、祖父母が老後農作業を楽しめるようにと、かなりの畑も一緒に買い柿畑が有り、富有、次郎、百匁柿、蜂谷、焼柿が実った。梨、桃、丹波栗、孟宗竹の筍も掘り、山羊小屋もあり山羊を飼っていた。また池から水を引き蓮田、慈姑田^{くわい}もあった。



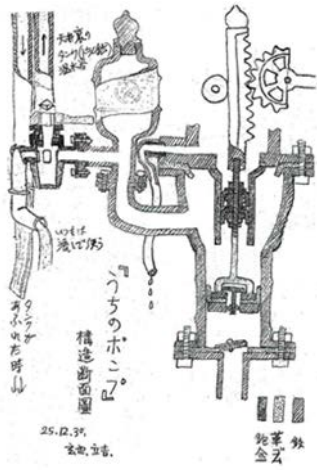
この家は急傾斜地にあり、飲料水確保のため大変苦勞し二重三重の設備をした。

○ **井戸** 下屋に掘ったが、なかなか水脈に当たらず異常な深井戸となり、一階のお勝手へのポンプ揚水断念。

中継ポンプ井戸の中に置いても二段構え となり大変重くなり、更に天井裏のドラム缶への揚水は無理だった。

○ **浄水設備** 農業用水の水を取り込んで、玄関両脇に瓦礫沈殿池や砂礫濾過池を設け、さらに室内に二段階の砂の濾過槽を通して水道並みの水質の水を得ていた。貯水タンクは中二階にあり、二階の手漕ぎのポンプでお勝手に上げ、さらに三方切替えコックで屋根裏のドラム缶に汲み上げた。重かったがこのドラム缶は水洗便所の水であった。夏は**太陽熱温水器**を兼ねていた。

○ **横穴井戸** 傾斜地の奥に向かって一階に土留めのコンクリート壁の一部から山側に向かって横穴を掘った。なかなか水は出ず、段々掘り進み延長は優に 10m 以上だった。遂に細く水が流れ出し成功し夏は天然の冷房にもなり、農作物や日常の洗い物に使った。



○ シリンダーの中をピストンが純粹に上下出来るようなギア付きの梃子がある手漕ぎポンプだった。

○下の方は普通の井戸ポンプであるが、さらに屋根裏のドラム缶まで水をあげるため、二重の腕革で水を止め、三方コックで屋根裏側に切り替えると、梃子の動きが滑らかになるように空気室が有った。

それでもポンプ上下の落差が 7-8m になるので相当の重労働だった。

○二重腕革で抑えても水が漏れると細い管から流しに垂れるようになっていた。

○ 屋根裏のドラム缶が一杯になるともう一本鉄管が有り、勢いよく溢れた。やれやれだった。昭和初期に実用化した太陽熱温水器である。

道路から玄関がありこれを一階と呼んだ。この家の設計は、全てバリアフリーだった。当時の大工さんは戸惑ったことであろうが、父は押し通した。足腰が弱くなったときに備え 座敷と四畳半の間の廊下は畳廊下であった。一階の床は半分以上が斜面から迫り出しており飯田の街が一望できた。

げや下屋(したやと呼んだ)があり、一階から階段があり降り口には孫達が落ちないように蓋が設けられた。下屋は、板の間と六畳間、農業機器の一面があり、三脚や鍬、鋤簾、剪定鋏、消石灰や消毒薬などがあつた。これらを長い土間で結んでいた。祖父母が住んでみるとかまどが欲しくなり西側に仮造作をしていた。農作業のため下便所があり、池があり段々畑の一面に山羊小屋があつた。

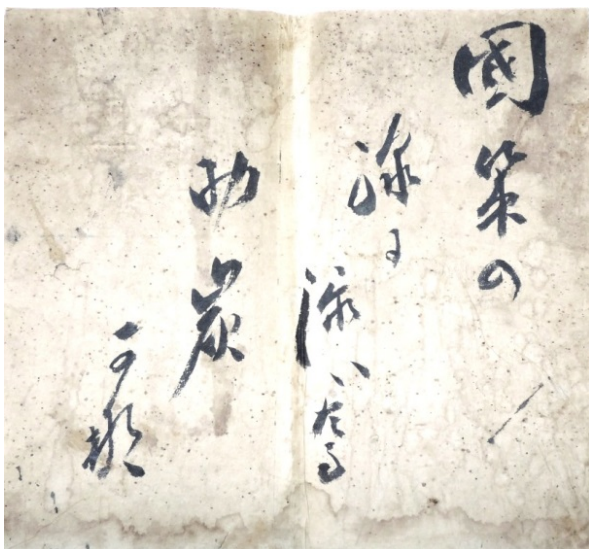
ここで硫酸銅と消石灰、砒酸鉛、砒酸石灰などを小型の竿秤で息を止めて量り、点着剤を加えボルドー液の作り方を体験し果樹の消毒もした。今思い返すと良くも親が危険な薬品の取扱を子供に許したものである。消毒用噴霧機は、真鍮板にメッキ仕上げであり、パイプや噴霧部の内部が錆びないように使う度毎に分解掃除したので原理も構造も理解したし、屋根裏のドラム缶への汲み上げポンプの構造も断面図を描いて理解した。

孟宗竹とハチク(淡竹)を切り花立てと線香立てを作り、多分 1942(S19)年 小3のお盆と思いますが、祖父に連れられて正念寺の墓と親戚の墓に建てて回った事を懐かしく思い出す。

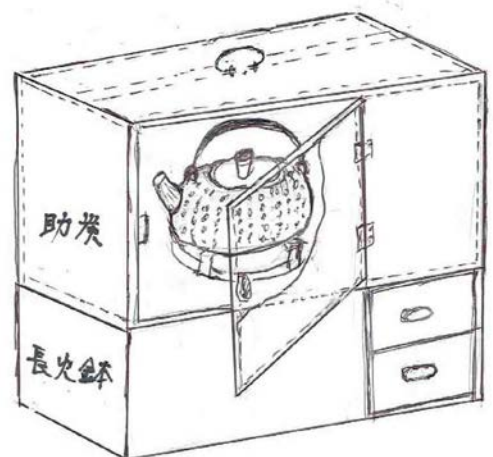
○ 祖父母の残した筆跡

○ 助炭 多くの家庭では長火鉢に炭火を絶やさず、シーンシンと鉄瓶でお湯を沸かしていたものである。

戦中になって火鉢に木の骨組みの箱を被せ、障子紙を貼り、扉を設け鉄瓶を取り出せる「助炭」と称する木炭節約策を奨励した。可燃物の箱は火の危険はあるが、これには目を瞑り少ない木炭で長くお湯が沸かせるというアイデアである。そこで指物大工さんに助炭の枠を頼み、障子紙を貼って作った。そこに祖父万次郎は一首残した。



国策の線に沿いたる助炭かな 祖父万次郎



長火鉢の上に載せた「助炭」見取り図

助炭は伝馬町にもありました。隣組の班長さんは実施状況を見て回った。保温効果で鉄瓶の取っ手が熱くて取り出すのに難儀し、子供には無理だった記憶があります。

○ 祖母の句や和歌

祖母^{かす}嘉壽は別荘に移り住んだが、建屋の中のお勝手はお雑司が楽なようにと木炭コンロであった。これに飽き足らず一階の西に小屋掛けし^{かまど}竈を置いた、隙間風が通る板戸に紙を貼り、燃えさしを筆代わりに多数の句や和歌を残した。



祖母の自筆

汁の寒に 落ち葉も混じる 焚き火かな
焚くもやに 刺した小芋や 子らの顔
隣組 一寸始まる 焚き火かな
霜凍る 朝の焚き火の 寒さかな
勿体なや 国に尽くさん すべて知らず
身に糊せんと 焚き火するかも
飯も汁も みな燠製の 焚き火かな

この額には載っていないが 焚くほどは 風が持て来る 落ち葉かな という句もあった。

○ 戦中終戦直後 静話会→大火後話しの会へ



○ 父は、戦中この家を活用し疎開されていた岸田国士、森田草平、他に各地から疎開されている方をお招きし、地元から日夏耿之介、矢高 東さん高堂正男さん他有志の方々が参集して交流を図りお話しをする「静話会」を始めていた。

○ 姉兄はお手伝いに駆り出されたが、小学 3・4 年の私は、大人の席には未だ子供だった。

○ 成人し上京してからは疎遠になってしまった。

○ この会の流れを汲んで大火後には新造の公民館で「話しの会」として長年にわたり月例会を 400 回も以上開いていた。

○ 年中行事など

年中行事も例えば 1 月 15 日小豆粥の日には二人一組で果樹に^{なた}鉋で傷を付け「生^なーりそろか 切りそろか」「生ーります 生ーります。」「そんならお粥を進ぜましょ。」と唱えながら回った。伝馬町から遊びに来たとき運良く山羊のお産を見た、専ら草食の山羊が間もなくして後産を食べてしまうのである。体力回復と授乳に繋がるのだろう。その子山羊と戯れ引っ張られて左手の小指の付け根に怪我もしたし、親山羊の乳も飲んだ。

茶色の名古屋コーチンを飼っていたが鳥家^{とや}に入ったので、近所の養鶏場に行き白色レグホンの有精卵を手に入れ抱かせ

雛をはやした。当時の鶏は、本羽根が生え揃い^{うずら} 鶉 ぐらいの時期には舞い上がって木の枝に止まることができた。やがて家禽らしく太り出すと舞えなくなることも体験した。下肥も汲み胡瓜や茄子の畑も手伝った。胡麻には綺麗な胡麻の虫が育ったし、栗の木には山繭(白髪太夫)の幼虫が群がっていて、やがて透明で網状の山繭を作り蛾が沢山飛び出してきた。蟬は春蟬、ニイニイ蟬、油蟬、ミンミン蟬(盆蟬)、日暮、ツクツク法師(オウツク ツクツク)など一通りいて特にツクツク法師はすばしっこくてなかなか捕れなかった。^{とんぼ}蜻蛉は大山蜻蛉、銀やんま、塩辛蜻蛉、赤蜻蛉は見上げる空一杯に無数に飛んでいた。お齒黒蜻蛉も見かけた。ホタルは小川に行けば、つかみ取りするほど捕れ、何匹か捕ってきて蚊帳の中に放し楽しんだ。ハンミョウもいた、濃褐色に光る玉虫もいた。天竜の支流の小川に足を踏み入れると足に触るほど小魚がいた。田圃には殿様蛙、池には土蛙、今宮神社の日陰の小川には赤蛙がいた。森に入ると、のそりのそりと^{ひきがえる}蟾蜍(イボヒキタと言った。)がいた。松洞川には沢蟹がいた、夜には電灯を頼って弁慶や鍬形虫の加藤、^{せーた}背板(深山鍬形のこ)、それに小型の梶原が来た、紙切り虫も来た。自然そのものだった。

小学6年生の秋、毎日富有柿を収穫し良い物は果物屋さんに引き取って貰っていた。冷え込みが強くなった晩秋の朝うつすら初霜ではないか、しまった!! 家内総出で慌てて収穫したことがあった。

初霜に 急ぎ取る柿 手に凍みつ

戦前に祖父母は逝ったが、父は祖母が第二次大戦の開戦直前に他界し、祖父が飯田の大火の直前に他界したことはせめてもの幸せだったと言っていた。飯田の大火で類焼したことも戦災に遭ったと思えば良い。と言い、母は、伝馬町の街屋は日当たりが悪く子供達が弱かったのに、この家ですっかり丈夫に育ったことを喜んでいた。

味噌醤油醸造業の収入が絶たれ、やむなく東京に進学したばかりだった姉が呼び戻され家業を手伝い、続いて販売から事務帳簿を切り盛りして人一倍働き、弟二人の進学を支えてくれた。この家には5年間ほど住み飯田高松高校一年から約3kmの道を往復徒歩で通った。この程度は普通だった。

やがて、1953(S28)年に事業再建に集中投資するため別荘を手放すこととなった。翌朝大きい青大将が広縁にいるのを叔母が見付けた。当時多くの家には鼠がいて天井裏は鼠の運動会だった。俗に青大将は家の主みたいなものだと言われ梁に巻き付いたりして天井裏の鼠を狙う。今は昔、中央高速道路の下となっている。

4、今宮町で、学生、そして独立

父母は飯田の大火で住宅と醸造蔵、設備、製品や原料を一時に失い、おまけに都市計画で江戸町から吾妻町への道路が善勝寺を貫通して拡張され土地が狭くなり再建は不可能になった。結局今宮町で再建を目指した。還暦近い年代からの復興は難渋を極めた。この中で姉は働いて弟二人の進学を支えてくれた。この恩は私の一生の宝である。

飯田高松高校を終え18才までを過ごした。浪人はしたが進学を果たし、信大工学部を卒業して東京の通信機メーカー日本電気に就職した。

漸く大火後の松岡屋の事業が軌道に乗り掛けた時期に1960年 **36集中豪雨災害**に遭遇した。工場は浸水し穀類など原材料に浸水被害があり、またもや再建の苦労を味わった。本集中豪雨今宮地区の写真集は当HP別項に詳述してあります。

兄は学者になり、私は電気技術屋になり息子が二人いたのに家業を継がなかった。木下家に嫁いだ姉が主人木下国光と二人三脚で松岡屋の事業を継いでくれ、木下家松岡屋で今に至っている。

現在は世代が変わり木下拓社長、浩子夫妻、更に祥平夫妻が継いで新製品に挑戦している。

5、その後 結婚後日野市に住んで

日本電気の技術者の終り頃になって大腸癌に罹ったが何とか克服し、始めて出張札幌で学会に出た時のこと。

「花の如咲くてふ 蟹を食みおれば、病癒えしを然と確かむ」

日電の勤めを終え出向先で新機種を開発しGマークを獲得した。引き続き拓殖大学に勤める機会に恵まれた。

東工大からお見えになった後藤尚久先生のお勧めを頂き学位取得に挑戦。無理が祟り心筋梗塞を病んだが学位を頂いた。

「詰まる血管 チョイとこじ開けて 亀辿り着く 博士号」

その後も東京計装(株)からmm単位の電波液面計の開発指導を請われ、65歳から喜寿まで長くお役に立つことができた。

「幾度か 病乗り越え来し 喜寿の春 子らの贈れる 自転車を駆る」

今まで妻、家族の尽力、多くの方のご指導ご鞭撻を頂いた御恩に感謝し、自然に暮らして行きたく望んでおります。

6、謝 辞

○ 昔の松岡屋の間取りと周辺の商店などをHPに載せたところ話題が広がりました。

それは三原館の傍の堀木古書店辛うじて名前を覚えているだけでした。飯田市立中央図書館から、古書店主堀木忠麿が信州日報に投稿されており、宮沢芳重氏が堀木古書店に立ち寄り、店主は三宅雪嶺を知っており全集を薦めたようです、これぞ探していた本だと気に入った宮澤さんが工面して入手するいきさつが書かれています。

一方、『人間 宮沢芳重』p162に宮澤氏が昭和21年5月に信濃書店で三宅雪嶺全集を見つけたとあります。飯田の大火は昭和22年4月20日ですから宮澤氏は伝馬町の堀木古書店に立ち寄られたこととなります。

同書の著者の一人松下拡氏は、大火後中央通りに移転したシナノ屋堀木書店を知っておられ、現在飯田唯一の古書店藤吾堂の伊原 修さんも、私の兄も中央通りのシナノ屋堀木書店を思い出してくれました。

○ 生家の思い出を書く過程で、上のシナノ屋堀木古書店のことを始め、その後お願いした同業他社の名称、年代、場所などを古い村沢武夫さん著の今昔家並み帳を調査して頂きました。また、百十七銀行とうろ覚えだった銀行名は伊那銀行伝馬町支店であったことに至る迄、飯田市立中央図書館の関口真紀さんがお忙しいのに、親身になって調査して頂きました。ここに深く感謝します。

(最初 2016.08.06 記、2017.10.10 一二階平面図差替、説明文に祖父母のこと、同業他社など加筆筆増補)